

世間と時世——生きられる空間

栗原隆

はじめに

人間とは何かという問題は、哲学の中心的な問題の一つである。人間の本質を、〈心〉や〈精神〉、さらには〈人格〉や〈理性〉など、内面的なものに見定めてきた哲学の伝統の中で、近年、〈身体〉を持つ存在として、統合的に人間を捉えた上での説明もなされてきている。もちろん、この言い方自体、大きな問題を孕んでいる。なぜなら、私たちは、身体を持っているのだろうか、それとも身体なのだろうか、身体ならば、身体の変化は本質的な変化に繋がるのだろうか、などという難問が残るからである。

仮に、私たちが、身体としての存在ならば、その身をおく「空間」が必要であると同時に、身体は、自然物と同様に、自らに「時間」を引き受けることになる。すなわち、空間的にも時間的にも、私たちは「間」で生きていくことになる。しかし、同時にそれは、物理的な空間と時間であるだけでは足りない。なぜなら、人間は、単に「物理的な存在」として割り切ることができないからである。

「心」は、人間の「内面」と同じように、これだ、と指し示すことが難しい。「心」はどこで明らかになるのだろうか。「心ある振る舞い」や「心ない態度」と言われる場面を振り返ってみると、他者との「間」でこそ問

題にされることが分かる。人間の特徴として、言語を操ったり、社会を構成したりすることが挙げられもする。これらの特徴も、他者との「間」で営まれるなかで際立たされることになる。すると、人間は、まさしく「間」に生きる存在かもしれない。本稿は、そうした人間のあり方を、カール・レーヴィットやヴィルヘルム・ディルタイを手がかりに、「世間」と「時間」の中で見直してみることを課題とする。

1 ヒトの間に生きる人間

ヒトの間に生きる人間

「わたし」とは掛け替えのない「自分」のことである。ところが、その「自分」とは、時に、私一人を指すだけではない。「自分」ということで二人称を指し示す地方もある。「自分の町」ということで、共同体的な広がりさえ持つ。「私たちは日々、教育・研究にいそしむとともに、地域への貢献についても思いをめぐらせております」というように、「私」や「自分」は大学全体に広がりを見せることさえある。つまり、「私」や「自分」とは、本来はこの私一人を指すものであるにもかかわらず、世間的な広がりをも持っているわけである。

もとより、「人」からして、単なる生物的存在としての意味だけでなく、そうした広がりを持っている。「人のものを取ってはいけない」という場合は、他人のものを盗むな、ということの意味する。「人聞きが悪い」というのは、世間体をはばかるという意味である。こうした場合、人は、世間までも拡張される。他方、「人のことはかまわないで欲しい」という場合は、自分に干渉しようとする他人に対して、相手にとって他人である私に干渉しないで欲しい、という形で、相手を媒介として私自身を「人」であると主張しているわけである。このように考えてみると、私が、人間である私であるためには、他人を媒介としなくてはならないよ

うに思われる。

私たち人間は、ヒトの間に生きる存在であるからこそ「人間」と称される、という把握は、和辻哲郎の次の叙述で周知のところである。「人間は単に『人の間』であるのみならず、自、他、世人であるところの人の間なのである」(「人間の学としての倫理学」『和辻哲郎全集』第九卷、一六頁、岩波書店)。人の間が世の中を構成するということは、男女の間柄が古語では世の中と呼ばれたことが端的に物語っている。「人間とは、『世の中』自身であるとともにまた世の中における『人』である。従って『人間』は単なる人でもなければまた単なる社会でもない。『人間』においてはこの両者は弁証法的に統一せられている」(前掲書二〇頁)。世間においてこそヒトは人間になると言い換えてもよいかもしれない。

人と人の間にある世間

そうした世間の渡り方には幾つかあるが、どのような渡り方、過ごし方も、それぞれに、世界の「世」の字で構成される。そして、ヨーロッパ語に即してみると、日本語の用法と通じるところがある上に、この広がりにはさらに規模を大きくして、生活圏や世界全体までも巻き込む。「世間」を意味する Welt や World は、「世界」をも意味しているからである。

「身過ぎ世過ぎ」で世渡りをする。世の中は広いようで狭いものである。そうした「世間」把握は、ドイツ語でも同じことのようなのである。たとえば、カール・レーヴィットは、次のようにこのあたりの事情を説明している。「世慣れた人」(ein Man von Welt)とは社会での作法を心得ている人であり、『世間通』(welt-kindig)とは、世間の仲間 (Mitmenschen) に精通している人、『世間知らず』(welt-fremd)とは、こうした世間に精通していない人、『遁世』(welt-flüchtig)とは人間を避ける人、『下世話好き』(weltlich gesinnt)とは、一緒にいる中でこそ自分の生活を享受する人のことであり、『世間嫌い』(Welt-verächter)とは彼の仲間の価値観を軽蔑する

人のことである。『世間』(Welt)がそのことについてどういふだろうかと耳を傾ける人は、仲間の言うことに耳を傾ける人である」(K. Löwith: Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen. In: Sämtliche Schriften. Bd. I, S. 31 — 以下、同書からの引用は「Rolle」と略記する)。

こうした世界や世間というのは、私たちが自らの生を展開する現場である。そして私たちは、世間に対しては、世間体を気にする。しかし、「世間体」を気にするという場合、私たちは実際に何が気になるかということ、隣近所の目であったり、あるいは、電車に乗り合わせた他の人の視線であったり、職場での噂になることであったり、である。すなわち、世間体とされる範囲は確定されたものではない。かといって私たちには未知の領域なのでもなく、私たちの活動範囲の中に含まれる領域ではあるが、その範囲は、たとえば、古町を歩く人々という見ず知らずの他人も世間体の対象になったり、あるいは仮に、自らがニュースにでもなるような場合には、全国の人たちにまで拡張されることになる。

世界とは人と交わる場である

世界についても同じ事情がある。たとえば、研究者の世界というような表現があるが、そうした類の世界は、芸能界、経済界、花柳界、男の世界、女の世界、表の世界、裏の世界という具合に、どんどん増えてゆくことからして、世界といっても必ずしも、私たちには見渡すことのできない果てしなく広く空疎な茫漠たる未知の領域というわけではなさそうである。むしろ私たちを規定するとともに、私たちが生み出す共同の領域だと言えるかもしれない。確かに、違う世界のこととは分からないとは言うものの、逆に人はみな、自分の世界を持つてもいるのである。

自分の世界には時にそこに耽溺したりもするかもしれない。しかし、自分の世界とはいうものの、それは自分だけの世界ではない。なぜなら、たとえば、真空管オーディオという、工芸品というものの二世代も前の、

滅び去るデヴァイスを用いて、これまた過ぎ去った古典芸能ともいべき六〇年代のロックを聴くという趣味が成り立つのも、同好の士がアマタいるのみならず、これが商売になるからこそ、いまだ真空管が製造されていたり、販売されていたり、旧譜がCDとなつて再発されたりもするからである。自分の世界に耽溺する際にも、私たちは、外の世界と繋がっていて、外の世界、すなわち、真空管オーディオの世界とか、ロックの世界と通じ合つてもいる。仮に、ゲームにはまつているオタクであつても、それは同じことで、そこにはコンピュータとか、ゲームソフトの業界と繋がつてこそ、ゲーム・オタクとして、引きこもりもできるのである。あまつさえ、外へと毎日出かけてゆく場合には、そこには、共同体として広がる世界と世間が待ち構えて、私たちはその中で生きている。

人との交わりで結び合うもの

外に出かけて私たちが人と出会う時、私たちは、生物としてのヒトと出会つていただけなのであるか。もちろん、買い物をした場合でも、レジで黙つて商品を渡して、黙つて支払い、黙つて商品を受け取つて、黙つて店を出るといふような形で、自らを単なる機械的な動きをする人体にしてしまつている場合は、そこに現出するのは単なる記号的な存在でしかない。しかし、知人に出会えば、人間的な結びつきが広がる。その時、結びつくもの、広がるものは何か。それは決して身体ではない。そこで結びつき、あるいは広がる、和む、交わるのは、身体ではなく、生である。レーヴィットによれば、「人間のあり方というのは、『世界のうちにあること』であつて、その『世界のうちにあること』は、『ともにある』によつて規定されているのであるが、本来のともにあることとは（…）『一緒に生きる』ということと同じ意味である」（Rolle, S.31）。

私たちが生きている共同体というのは生活の現場である。それは単に新潟市とか、三条市とかという自治体の意味だけではない。もちろん、寺尾台町内会というような自治会も共同体ではある。しかし、本来の共同体

は、互いに共に、それぞれの生が同じ身体・組織のように結びついて生きるところに成り立つとすれば、それは、会社であったり、大学であったり、もちろん自治会であったり、生きている現場である。私たち人間は、単なる生物としてだけではなく、ヒトの間で生きる人間として、他の人とともに生きている。その現場が共同体なのである。そうした生とはどのような構造にあるのだろうか。

2 共同の生を生きる人間

生きているということの意味

私たちは、生きている。そのことを生きている中においてこそ確証する。単に生物的な命を生きているだけではない。それぞれの「人生」という生を生きているのである。一概に「生」といっても、レーヴィットによれば、四つの意味に分類されるという。一つには、「生物学的な意味での生きている」ということである。動物的な、つまり自覚するまでもなく、事実として生きている、ということである。

二つ目に、誰その生涯というような、「伝記的な意味での人生」が挙げられている。「生涯」ということだと考えてもいいだろう。このような生を生きる主体として人間を捉えるということは、実は大きな意味がある。それは、私たち自身、「頭で分かっても、心は別の方向へと傾く」という表現を用いたりするように、「理性と感性」とか、「心と身体」、「知性と本能」、「精神と肉」、などの対立するエネルギーの統一態として、人間を捉える見方が、西洋思想史の中では根強かったからである。こうした分裂を担った存在としての人間は、私たちの実感するところでもある。矛盾する思いの中で生を営むのもまた人生である。相克するエネルギーの統一態として人間を捉えるなら、往々にして、対立するエネルギーのどちらかを重視するべきかという発想で倫理

が語られることになる。しかしながら、「人生」として人間を捉えるなら、まさに、「原理的に問われるべきは、人の生涯という概念のうちに既に見られるように、人間において、自然と精神とのどちらが存在的に優位か、ということではなく、自然と精神とがどのようにして統一されているのかということ」(Rolle, S.32)になる。しかも、動物的な生にあっては、人生の意味や人生の軌跡、その脈絡など、生を内部から連関を持って理解することができないのに対して、人生や生涯という観点から人を捉えようとするならば、内的に連関付けられるところにこそ、その人の人生が成り立つ。

生き方として捉えられる人

生涯という側面から人間を捉えようとする、それは何の誰それという一個人の生でありながら、その人ひとりの問題では済まない。もちろん、家族関係も大切であるが、友人関係、学校生活、職場での人間関係、日常生活での交友関係なども、照射されるべき側面になる。これが三つ目に類別される、共同的な、互いの間での生である。

そもそも名前からして、栗原隆という名前のうちの「栗原」という姓は、父方の血統、つまり特定の歴史的な共同世界から由来しているわけである。そして隆という名前は、自分自身のためだけに持っているのではなく、他人からそう呼んでもらえるように、他人からそういう人と思われるように、と念願されて付けられた名である。聞くところに拠れば、永井隆博士のご令名からインスパイアされてつけられた名だという。したがって、名は個人の名であれ、社会的な意義を持っている。私自身の本来の呼び名は、「私」かもしれない。なぜなら、「この茶碗を割ったのは誰だ」と問いかけられて、答える場合は、「私です」と言うだろうからである。ところが、「私」とは実は私だけでなく、誰にでもあてはまる「私」でもある。したがって、「隆」という名前で他人の「私」から区別される必要があるわけである。

子どもが「たっちねえ、ほんとはねえ…」と語る場合、一人称を用いることができないのは、他人も使う「僕」と自分を指す「僕」との媒介ができないから、自分のことを名前で呼ぶと考えられる。自らを対象化することはできるにせよ、他者との関係の中で自らを捉え返すことがまだできていないからということもできよう。なぜなら、私たちでさえも、初対面の人達の間で自己紹介するような場合、「栗原隆と申します。長岡高校を卒業して云々」と、まるで他人事のように第三者的に語るからである。名前は本来、自分自身から疎外されているものかもしれない。誰それと名前を挙げて伝記的な叙述をする場合は、客観的に描出する。個人的な思いや感慨を中心に描かれる「日記」とは違って、伝記的に叙述される人の生涯は、生活表現のきわめて些細な点にいたるまで、「個人のなによりもまず様々な同時代の生の関係によって規定されている」(Rolle.S.37) となる。その特殊な生は、共同体における生の相互関係の中で形成されたのである。自己紹介の場合とは違い、人間関係の中で私たちは自らの生を捉え直す。「それぞれの人に、自分は何者であるかを教える生とは誰であるか、という問いは、人間の共同生活から教えられるのである」(Rolle.S.37)。私たちには、「世間」があるからこそ、そして「世間の目」を自らに具えているからこそ、自分を客観的に見ることができ。自分を省みることができ。私自身を見ている私とは、「世間の目」であると言って良いかもしれない。

人生の意味と目的を感じさせる世間の目

ところで、そうした誰その生涯という形で人生を追う場合、私たちは、その人の何を把握しようとしているのであろうか。確かに、その人の生涯ではあるが、決して年譜的な人生行路を把握しようとしているのではない。私たちは、ある人の人生の内的連関を伝記として語ることで、何を把握しようとしているのであろうか。それは、その人生の「意味」や「目的」というべきものであろう。私たちが動物と違うのも、人生の目的や意味を自覚するからである。「人間の生は、究極的、実存的にはまず、意味があるとか意味がないとかという意義

付けの方向において規定される。人間が一般的に自分の生の意味そのものを問うことができるということ、——そして人間がこのように問うことができるからこそ、生の意味というようなものが存在する。このことが意味しているのは、人間の生というものが原則的に問題だということである」(Rolle, S.37)。これが、レヴィットによって四つ目に類別される生である。

私たちが人生の意味や目的を問うことができるのは、動物と違って、自分は「栗原隆」であると同時に、他人もそうであるような「私」であるという形で、自らを媒介的に捉えることができるからに他ならない。とはいえ、それは、共同の生の関係の中で私の人生が育まれるからこそ、そこに目的や意味を自覚できるのも事実である。すなわち、共同という世間の中で私たちは生きるからこそ、「世間の目」でもって自分自身を省みつつ、人生の意味や目的を捉えることができる、その意味で「世間」は人間が生を省みる自らの「器官」「デヴァイス」でもある。

身内としての世間

言葉を変えるなら、「世間様」は外部にありながら、一種の「身内」である。自らの属する町内会、職場、学校、サークル、時には同じ共同体の市民、そうした人たちを私たちは「身内」として受け止め、その身内の眼差し、つまり「世間の目」で自分自身を捉え返すところに、「世間体」が見えてくる。自らの生の目的や意味も、一旦、世間の目を通して自分の人生を捉え返すところに自覚されると言えよう。「身内」意識は、私たちの人生を評価する。私たちは「身内」という世間の環境から規定されて生きつつ、その身内を自分自身として捉える。「身内」とは、身体の内など存在しない外部の環境でありながら、やはり「身の程」を思い知らされる点で、自分自身でもある。世間という環境を、私たちは自ら、自分のために生かしながら、生きてもいるのである。

翻ってみるに、「環境」でさえ、私たちの外部にあるだけでない。家屋は、人間の外部にあり、人間を条件付ける外部環境であると同時に、人間の内面の表出 表現であるとも言える。その意味では、実のところ、私たちの筋肉や骨組みよりも、人間の奥深い内面を表していると言うことができるかもしれない。いや、私たちの身体でさえ、その調子いかんによって、条件付けられて、行動したり、判断したり、性格や思想に影響を及ぼすとしたら、その本人の「環境」だということになる。そしてその「環境」が果たして私たちの内部にあるのか、それとも外部なのか、曖昧になってくる。「それらは人間の主体的な内容そのものの一部だとも考えられるが、同時にまた、人間の自由な選択の意志を外側から縛ったり、そそのかしたりする環境だとも考えられるからである」(山崎正和『藝術・変身・遊戯』中央公論社二一八頁)。そうすると、「環境」は、「世間」と同様に、外と内との往還を境地として成り立つものだと言えよう。

そもそも、家屋がイエと呼ばれるが、ウチとも呼ばれることは示唆深い。外部にあって、しかもウチなのである。ウチは、関西弁では〈私〉を意味することもある。ウチでは家事は夫がすることになっています、という場合は、ウチとは家屋ではなく、家庭のことである。ウチの町内では、という場合は、ウチは町内にまで拡大するとともに、ウチでは一限は八時半から始まり、お昼休みでさえ授業時間が設定されていますという場合は、ウチは大学のことを意味する。教室のウチにいながら、ウチの公民館は、と言う場合のウチは、自治体を意味する。従って、ウチなるものは、世界へと自らを拡張する装置だと言えるかもしれない。もとより、ウチとはソトと一体であるようである。「内面性の豊かな人」というのは骨太な人や内臓の大きな人のことではない。内面とは、私たちの身体の内にはない。むしろ外部に表現される教養や寛容さ、他人への理解力の深さなどを見て、私たちは、内面性の豊かな人と表現するのであろう。

3 環境を選び、創り出す人

選び取られる環境

「子どもの成長にふさわしい環境を」などという標語が作られるところを見ると、私たちは、環境に規定されてしまうという観念が常識なのかもしれない。しかし、ユクスキュルは、動物は自らの生存にとって有利な外部の環境を選び取ることを明らかにした。人間も動物としては、自らにふさわしい環境を選び取っているのかもしれない。

環境は私たちが自覚的であれ、無自覚的であれ、選び取り、創り出すことさえ、日常的に行っていると考えることもできる。たとえば、本屋さんで立ち読みしていて、気がついたら、外がすっかり暮れていて、小雨さえ降ってきていた、というような場合である。日が暮れる、雨が降り出したというような環境に私たちが規定されているわけではない。むしろ、私たちの行動が、それにふさわしい環境を選び取っているのである。「環境」というものが人間の外側にはつきりと確認できるのは、その人間が一定の明確な目的を持って行動に従事している場合だけだといえる」（山崎正和『藝術・変身・遊戯』中央公論社二一九頁）というわけである。

石油が大量に埋蔵されていても、近代産業がいち早く発達するというものでもないように、文教地区だからといって、そこに住んでいる学生が勉強しているかといえれば疑問である。「こうした観点から見れば、環境はむしろ人間の意志的な行動の『産物』であって、環境が文化を生むというより、逆に文化が環境をつくり出すというのが正確かもしれない」（山崎正和『藝術・変身・遊戯』中央公論社二二〇頁）。

私たちの日本文化が花鳥風月を嗜み、自然へと開かれた日本家屋に住まうのに対して、大切な家具が日に焼けないように、わざわざ日蔭になるマンションを好んだり、外敵から身を自助努力で守るために、扉が内開き

であったり、その土地の文化が環境を作つてゆく。一人ひとりにとって、自分の趣味や好みに応じて自らの部屋を作り上げてゆくように、私たち人間にとって環境とは、単に生態学的な環境のみならず、生に裏打ちされているものだと言えよう。すると、私たちは環境や自らの人生を選び取っていると同時に、環境や人生が私自身を作つてもいることになる。「それまでは彼の行動の『環境』だとおもわれていたものが、彼の履歴を形成する真の主体だといえるかもしれない」（山崎正和『藝術・変身・遊戯』中央公論社二二四頁）。ここにも、人間一人ひとりと環境との往還的な循環構造が見て取れる。

体験されてこそ、空間

そもそも私たちは、外の景観に目を向けていたからといって、必ずしも見えているわけではないということはある。見えるだけで分かるのか、見ただけでは分からないのか、というモリヌークス問題は、近世哲学を貫いた問題であった。視覚と触覚との、認知の優位性をめぐる議論であったが、そこから明らかになったことは、認知における身体の意義である。

私たちが生きて存在しているためには、時間の中で生きていると同時に、そこで生きる空間をも必要としている。いや、体験されてこそ、空間は人にとって意味を持つが、そうでない空間は空でしかないかもしれない。その意味では、空間は座標軸のような等質的で無限に広がっている数学的な空間のようなものではない。「私」が立つところこそ、そこから前方へと空間が開かれ、左右へと空間を振り分ける空間の中心、そして私たちにとつて、世界とはテレビの向こうに広がるものではなく、まさしく私たちの身体を中心に展開されるのである。

空間 (Raum) はまた、空き間 (Zimmer) である。集会室は、集会の空間と言わず、集会の場所 (Ort) と言うところからも、空間と場所と違うことが分かる。空間は、「空き地」「隙間」でもある。「余地を与える (Raum gewähren)」とも言われる。「つまり、ラウム (Raum) とは、その最も広い意味において、運動のための『余地

〔Spielraum〕』であり、物と物との間の『間隙』であり、人間の周囲にある『空いている場所』のことである」（O・ボルノー『人間と空間』せりか書房三三三頁）。「隙間産業」とは、決して隙間に位置している産業ではない。

この空間の分節的な構造を成しているのが、「場所」と「位置」である。「空間とは、その中にすべてのものが自分の存在する席、自分の場所、あるいは自分の位置を持っている包括的なものである」（O・ボルノー『人間と空間』せりか書房三七頁）。

場所（Ort）については、「空間」が拡張されるし、中心を持つとは違い、「場所」は、「正確に固定されている地点」のことであって、「この特定の箇所に布置されている」（O・ボルノー『人間と空間』せりか書房三九頁）。とはいうものの、「居場所探し」というのは必ずしも場所を探しているのではない。むしろ、自らの生き生きとする境遇を探しているであろう。その意味では、「所を得る」というのは、単に物理的な場所のことではなく、まさに境地のことである。「所替え」とは要するに転勤のことである。「場違い」も場所を間違えたわけではない。ただ、「座を変える」ように人は、「場を変える」ことはできない。「場繋ぎ」とは、場所と場所とを繋ぐことではない。「座（Selle）」について、「座が白ける」というのは、その場所が白くなることではない。「場・座が持たない」のは、雰囲気のことである。「席を失った」というのは、座布団をなくしたという意味ではない。「席を占める」というのは、「座席を確保」することではない。

このように、空間も場所も場も所も座に到るまで、単に物理的なものではなく、人間にとっての意味を持っている。すなわち、人間によって体験されてこそ意味を持つということになる。その意味で「体験されてこそ空間」だと言えよう。ここにも、内と外との循環が成り立つのである。

4 時世を作り、歴史を生きる人

時間的でもある世

和辻哲郎によれば、「世はまず第一に『代』であり『時』であった」（和辻哲郎全集第九卷『人間の学としての倫理学』二五頁）という。これまで私たちは、私たちの生きる生活の現場として、「世間」という世の中について見てきた。「人の間」や「世間」、「共同体」、さらには「空間」や「環境」という形で、体験を通して私たちは、自分でないものを自らに同化しつつ、自らを拡張するデヴァイスとして、「世間の目」とか「意味づけ」などの機能を果たすことを確認してきた。そして、そうした意味づけは、私たちが生きている時間の中でこそ行なわれるのである。確かに、物理的な時間は流れ去るが、人間一人ひとりにとっての時間は、自らの体験の中で生かされている。このように、人によって体験される時間を分析した哲学者にデイルタイ（一八三三―一九一）がいる。「生のうちには、他のすべての規定の基礎となる、生の第一のカテゴリーの規定として、時間性が含まれている。このことは既に、『人生行路（Lebensvorlauf：生涯・経歴）』という表現からして明らかである」（W. Dilthey: *Gesammelte Schriften*. Bd. VII, S. 192）。すなわち、「生」を根本的に規定するものとして、「時間」を捉えたのである。生は、時間をかけて、時間を通して育まれる。そして時間こそ、生の限界をもたらしもする。さまざまな時を超えて形成される生、それらを通して、私は私であるといえるのはどうしてなのか。

私たちにとって物理的な時間は流れ去りはするものの、記憶や経験という形で、個々の事象は私たちのうちで脈絡を持つてくる。それによって初めてそれらの事象は、私たちにとって意味を持つてくるわけである。このことは二つのことを意味する。すなわち、その時その都度に営まれたさまざまな体験を通して、一貫した人生における意義が、脈絡を通すことによって成り立つ上に、それによって、〈私〉が〈私〉であり続けることが

できるようになる。自我の連続性と言って良いかもしれない。「時間の流れが統一的な意義を担うからこそ、その流れのなかで、現在における統一が形成されるのであるが、それは、私たちが体験と呼ぶことのできるものうちで最も小さな統一である。さらに進んで、生の諸部分が中断的な出来事によって互いに切り離されている場合であっても、人生行路に対する共通の意味によって結合されている時、これらの生の諸部分をさらに大きく包括しているそれぞれの統一を、体験(Erlebnis)と呼ぶ」(W. Dilthey: Gesammelte Schriften. Bd. VII, S. 194)。デイルタイによれば、自らの人生の意味や目標を自覚してこそ、自らの生における個々の体験が統一的な連関を持つ、ということになる。

体験を通して理解される生

人生行路は、それぞれ個別的な事象から成り立っているが、それぞれが互いにその人の人生の目的や意味というものを自覚している中だからこそ、互いに連関しあうとともに、〈私〉を形作る要素となっている。「生の過程は、部分から成り立ち、互いに内的に連関しあっている体験から成り立っている。それぞれ一つ一つの体験は一つの〈自己〉に関連付けられると、その部分になっている」(W. Dilthey: Gesammelte Schriften. Bd. VII, S. 195)。

体験の豊かさは、人生理解の豊かさに繋がる。日常的な体験しかしていない場合には、生に対する理解はその範囲に留まる。個別的な体験しかしていない場合は、人間理解の範囲はそれだけに留まる。「どのような精神的な事実内容(Tatbestand)であろうと、こうしたことについての私たちの知識は、体験からしか得ることができない」ということは論議を待たない。私たちが体験したことのない感情を他人のうちに再発見することなどできない」(W. Dilthey: Gesammelte Schriften. Bd. VII, S. 196)。逆説的に言うなら、自分を理解できる程度にしか、他人を理解するはできない、と言えるのかもしれない。

伝記によって、外面的な出来事を人生の意味と関連付ける

人生を理解する一つの典型として「伝記」がある。これは他人の生を客観的に理解する現場でもあるが、私たちは他人の伝記ではなく、自らの半生を省みて、自らの歴史を綴る場合もある。「自伝」である。「自伝こそ、生の理解が私たちに顕れる最高の形式であり、最も教えられることの多い形式である。ここでは、生の過程・生涯は外面的なもの、感性的に現象するものであって、ここから理解は、ある特定の境遇 (Milieu) の内部での経歴をもたらしたものと迫ってゆく。しかも自伝においては、この生涯を理解する人と、この生涯を生み出した人とは同一である。ここから理解の特殊な親密さが生じる。自らの人生の歴史の中に連関を求めると同じ人が、(…) 自分の人生の連関をさまざまな観点の下で形成してきたのである」(W. Dilthey: *Gesammelte Schriften*. Bd. VII, S. 200)。人生を綴ってみてこそ、初めて、外面的な出来事を外面的に過ぎ去ったものとしてではなく、自らの経歴を生み出したものとして、捉え返すことができる、というわけである。

人生の意味が知らされる世間

自伝を書く場合だけではない。私たちが自らの人生を省みて、自らの人生の目的と意義とに照らして、個々の事象を捉え直す時、そこにばらばらに切り離された出来事ではなく、必然的な意義の相を帯びて、見えてくるであろう。「私たちは思い出しながら省みる時、人生の切り離された諸々の分枝を繋ぐ連関を、それらの意義というカテゴリーのもとで捉える」(W. Dilthey: *Gesammelte Schriften*. Bd. VII, S. 201)。私たちは、自らの体験を手がかりに、自分自身を捉え直すのであるが、そうして捉え直すことができるからこそ、そこに自らの体験が人生にとって必要な一コマであったと自覚され直す。そうした人生の現場は、歴史的な時間において育まれるとともに、世間もそうした人生の現場であった。世間という共同こそ、私に私の人生の意味と目標を自覚させる契機に他ならないのである。

「世」はまた人の社会を意味する語である。棄世、遁世とは人の社会から脱出することであり、世情、世態とは人の社会の有りさまである。しかもその社会は、世途、世路というごとく何らか場所的のものとして理解せられている。(…)すなわち一方においては『代』であるとともに、他方においては世に出る、世を捨てるというごとく社会を意味している。世渡り、世すぎはこの社会において生きて行くことである」(和辻哲郎全集第九卷二五頁)。

「立身」が考えられなくなって久しい。パラサイトのように生きていくこともできるからである。しかし、私たちの人生という小舟は、絶えず世の流れに押し流されている。私たちが、悩みながら、思い出しながら、そして望みを抱きながらこの波間を漂う限り、私たちは充実した思いで、常に現在を生きることになる。過去を振り返ってみても、それは、私たちには変えようのない出来事でしかない。ただ、その体験のもつ意味は、今生きる、これから生きるなかで、変えてゆくことができるかもしれない。その意味で、「私たちは未来に対して向かうなら、活動的で自由であるのを感じる」(W. Dilthey: Gesammelte Schriften. Bd. VII, S. 193) ことができるのである。

結 語

「間」とはもとより、〈何かと何かの間の、何もないところ〉を示す語である。何もないところに自分が成り立つとすれば、〈自分でないところの、何かあるもの〉を通してこそ、自分が成り立つとともに、自らに〈自分でないもの〉を際立たせる契機を備えていることもまた、明らかであろう。その意味で、〈間〉とは、自らを自覚させる契機である。身過ぎ世過ぎのためにしなくてはならないことが何もない時間を、自らを振り返るため

に用いることは、まさしく、間に生きる人間にふさわしいことだ、と言えるかもしれない。そして、身を立てる〈間〉こそ、私たちが求めて止まない、そして生きている限り、必要なものなのである。

《付記》

本稿は、二〇〇〇年一二月の『人文科学研究』第一〇四輯に発表された「風景論のためのメモランダ——風景と触覚」、二〇〇一年八月の『人文科学研究』第一〇六輯に発表された「風景論への架橋——中心と境、街と橋」、さらには、安彦一恵・佐藤康邦（編）『風景の哲学』（ナカニシヤ出版、二〇〇二年一〇月）に収載された「景色と気色——おもむきと佇まい」に続く、風景論の試みの連作の一環である。また、科学研究費補助金（基盤研究（B））「思想表現媒体から捉え直される、人間にとっての『空間』構成の意義についての研究」での成果の一部である。